

1917年(大正6年)[22歳]

「樅の日記」(小池政美日記)(1)

—— 1917年7月20日～12月31日 ——

小池政美(編者小池辰雄)

薔薇の花にそのかおりあるごとく、
この人の心にあるセンスあるらん。

Likewise the Spirit also helpeth our infirmities:
For we know not what we should pray for as we ought:
But the Spirit itself maketh intercession for us
With groanings which cannot be uttered.

—— Romans.VIII.26. —— Easter 1921.

斯くのごとく御霊も我らの弱を助けたもう。

我らは如何に祈るべきかを知らざれども、

御霊みずから言い難き歎をもて執成し給う。

—— ロマ書第8章26節 —— 1921復活節

「樅の日記より」序

小池辰雄(編者)

「樅」の聖書の葉に記されてあるこの聖句にもまして、「樅」の心をあらわすものはなかるべく、その生涯を語るものはなかるう。

聖書と偉大なる書籍とは私の生涯の友であらねばならない。その外に私はここに一つの手離すことの出来ない書き物を有っている。それはこの「樅の日記」である。これを繙くごとに私は活ける人の親しき言を聴くの想いである。然り、彼は今も勿論生きていて、ここよりはもつといい国に。「清き岸边に」て相会う日まで信仰によりて語り、共に共に聖名を讃えつつ前進するであらう。

恩師藤井武先生の、私がここに樅と称える此の人について書かれし文字を、次にしるそうとするのであるが、どうか読者よ(もしこの『羔』に読者あらば)、其の箇所を「唯見て過ぎて」「ダンテの言」いただきたい。

「小池政美君は稀に見る純なる人格であった。私が君を識つたのは僅かに君の地上に於ける生涯の最後の二年間に過ぎない。しかし私にとってその記憶は永久的である。



君の人格には或る意味に於てイエスの香いがあつた。ガリラヤ湖または橄欖山かんらんの如き背景にふき適ふわしきものであつた。」

「君は或る意味に於て悲哀の人であつた。君の信仰はただ感謝々と叫んでよろこび躍るようなたちのものではなかつた。君にはいつも深みがあつた。しかしまた深みの中に言いがたい豊かさがあつた。……君の「信仰」は特に貞潔のそれであつたと言いたい。……君は近代人の腐敗しきつた情性を遙かに見下して、曙あけの明星みょうじようのごとく輝いた。」

「幸なるかな心の純きよき者、その人は神を見ん」(主イエス)

日記はいのりの心持を以て神の前に我れと我が身に語りつつ書くものである。内容の上からは人を相手とすることは勿論あろうけれども、日記を書き記しるす事それ自体は絶対に自語独白であつて対話ではない故に、独特の世界である。この独特の世界に於ける唯一つの対話者は神あるのみである。それ故に日記に於ては最も純粹なる、あるがままの言を見る。私がここに載せようとするのは日記よりであつて全部ではない。

わが「樅もみ」(小池政美)は自分の日記を私に読まれようとは夢にも思わなかつたろう。況まして此かくの如きことをされようとは。天の樅よ、どうかこの愚を赦してくれ。ただこれが真理の眞実なる証しの一つともなるのなら、どうかもう一度私のため犠牲となつてくれ。

〔「符は編者の註(1932年11月3日、編者残樅〔小池辰雄〕生)何故の筆写か。兄の日記を筆写することは、私にとっては兄と語ることである。その文字によつて私は兄の、活ける兄の人格と何ものか人生のリアティーに触れる。日記を通して兄は、主にあつて私に呼びかける。決して心靈的神秘的対話をするのではない、もし然らば私の信仰は健全なものから遠ざかる。わが兄よ、天にて感謝されよ、また祈られよ、わがために。〕

1917年7月20日～9月6日(Epoch-Making Summer, 20. July. 1917～6. September 1917)〔小池政美の帝大法科1学年の夏、よわい齡23才「数え年」の時〕。わが「樅」が自らEpoch-Making Summer「画期的夏」と呼びし夏が語るところを聴きこうと思う。この1917年「大正6年」の夏である。わが兄をオシタ大将として親戚の男児等が片瀬に海童生活を営んだのは。これはわが少年時代の絶頂であつたと云えよう。〔編者は当時、附属中学2年生——辰雄〕

○1917年7月20日(金)

晴。片瀬へ。8…15東京発、大船乗換、9…54藤沢着。大船乗換がたたつて今日は非常に荷物の具合が悪い。迎えに来てくれた金五郎の手に五つの夜具包や行李こくりが入つたのは1時だった。片付いて見ると8号「別荘地の借家の番号」は住み心地のよき相な家だ。夕方、山本家へ御挨拶に行かれて青木のお婆様は5…19の汽車で帰られる。山本本家では非常に親切にしてくれた。



○1917年7月21日(土)

朝、実さんと一緒にOur first bathing「我らの最初の泳ぎ」をやる。何とを考えても俺は海の子だ。

〔日本をいざ立ち去ると云う旅の途で、沼津海岸に立つて祈った兄である。その写真は永く僕の書齋に掲げられるであろう。〕

朝9時、喬^{のぶ}さんにひきいられて四郎、辰雄、宣彦来る。急に賑やかになった。午前と午後と泳ぐ。お昼も晩も大変な喰べ方だ。台所を間諜^{まじ}つかせる。夕食後、柳澤訪問。心地悪い無理強いには困ってしまった。龍口寺の山へ登る。相州西部一帯一眸^{あつ}の下に聚^{あつ}まる。8時半寝た。夜中に目がさめる。お隣は未だあかあかと灯火^{あかり}がある。おじ様「吾妻^{あづま}」の網は未だ終らぬらしい。

○1917年7月22日(日)

晴。小さな四人は釣に出かける。何もゲーム「獲物」はなかった。富士子に少々文句を云う手紙を出す。昨夜のおじ様は二才^{ばら}の鰯^{いわし}が大部揃った。「意味不明」

午前、午後の泳ぎ。山口哲彦君の父母弟妹が前どなりに見える。是から棧橋「江ノ島の」へ行く可し。明日から鳩山氏民法を始める。

○1917年7月23日(月)

晴。朝、午前、午後の泳ぎ。………今日から、皆、勉強を始める。………

今日こそはと思った武田おじ様おば様がとうとうお出でにならぬ。お菓子が無くなりかけている際として可成の悲観風^{もたら}を齎^{もたら}す。夕方皆でお菓子でもお送り下さるようにと頼いの手紙を書く。泰ちゃん「青木泰彦君は従兄弟中の最年少者で東京に残っていた。彼は山形高校在学中病没した」にも出した。

○1917年7月24日(火)

晴。朝、午前、午後の泳ぎ。午後には小組とボール。13対11で勝ち。トランプでも大勝。大組大元氣。「小組とは年少者等の組のこと」。夜、急にコンパがしたくなる。鎌倉まで力餅を買いに行く。うまかった。

〔編者註。良く遊び、良く食べ、良く眠った。起床から就床まで軍隊式に時間の割当てがなされ、それを良く遵った。戸板を並べて飯台が出来た。同じ戸板に寄って毎朝一時間の勉強をした。そのときは図書室の如く静粛であった。日曜は勉強を廃した。水泳の生活に於て昼食後の午睡ほど心地よきものもまた稀である。楽園の眠りはあのようなものであろう。〕



○1917年7月25日（水）

晴。……午前午後の泳ぎ、今日はボールで11対10の負、大組元気なし。吾妻おば様からおせんべいとサンドイッチとを戴く。

○1917年7月26日（木）

……朝9時、弦〔青木三弦氏のこと〕来る。朝の泳ぎは気持ちがよかった。……………

○1917年7月28日（土）

〔27日略す〕保〔山本保、義弟のこと〕見える。

*

○書翰（樅の日記帳の中より）

〔次に掲ぐるは1917年夏〔大正6年〕、わが「樅」の認めし書信、片瀬より西片を望みたる六枚続きの風景絵ハガキに記されてあり。日記帳の間に挿みありしもの。但しこれは一度投函せられしものであつて、書翰の役目を果たしたること明らかである。――

編者 小池辰雄

拝啓 毎日の晴天に海は大当たりに御座候。今日初めて雨、三週間振りの事に候え。農を業とする人々の喜びは固よりと存じ候も我等にしても必然的に休養す可き事と相成り、何となく暢然たるもの有之候。四方〔温泉〕は如何に候や、途中どなたにも別に御変りもなかりし事と祈り候。御所承りてよりフデとらんと存ぜざるには候わざるも、明日は勉強なしの日曜にも有之、申上げんと欲する事が、早き程確たる印象あるがままにこの手紙の明日着くか明後日着くか等にかまわずに机に向かい申候。

予め御断りしたき事二三有之候。申上げんとする事は私の日記の内容たる可き事に候。日記あるが故に母様おば様にお目にかく可きや否やに關しては可成の躊躇を感じ候いしも、思い切ることに断め候。母様おば様に申し上げ可き文中に議論がましき事書き列ぬるの当否は暫く避けたく存じ候。もと日記なるが故と御考え下されたく候。日記なるも尚母様おば様に申し上げ可き事なるが故に、単に日記ならば書かなくとも好き事を書かざるを得ざる場合有之可きも、之がために日記ならば書く可きことを省くことは無之を期し申し候。意外とお考え下さる可きこと有之もや存じ候わず、但し是が本当の祈りに候。

惟うに母様おば様を驚かせまいらす可き事も有之可く候。是に就いて私に対する御注意は難有く存じ候も片瀬の我等に対する御干涉はお控え頂き度候。どうか母様、おば様の御手にては動かす可からざる事実として御覧下され度候。革命起こす可くんば私の手一々にて沢山に候。十分なる力を有しつつ、之を用いざる所以は変化を悲惨と考うるが故に候。ただ他日の御参考とも存じつつ申上ぐるのみに候ことよくよく御含み下され度存じ上げ候。



この絵葉書は片瀬より眺め得る圈内の景に候。恐らく御いで下さる可くして又御いで下さるまじきおじ様おば様、未だ一度も御いで下されざりし母様にお目にかく可く、又恐らくは今年が此所で暮らす最後の年なる私の長き思出ともなる可きよすがとして求めたるものに御座候。但し私の所謂片瀬は茲に明瞭ならざるを遺憾と存じ候。四枚目の右の黒きが我等の家の周囲なる小松原に候。

敬具

大正6年7月28日

政美 拝

母上様

おば上様

〔附記〕

譬^{たと}えば美わしき囿^{にわ}の子鹿の如く、事なき日を、事ありと考えて暮らしていた日は何時^{いつ}か昔となる。昔という感念が慕わしく思われるのは、一は人間性の根本的分子とも云われるかも知れないが、蓋^{おお}うべからざる他の一因は今を苦き時と思うが故である。近頃は事ある毎に——事あつて我が弱き手に余る毎に思わざるを得ぬ。理に奔^{はし}れば角^{かど}が立つ、情に棹^{さお}せば流される、意志を通せば窮屈だ、兎角^{とかく}人の世は住み難いと云つたつて住ま^ずには居られない。居を何所にかえて見ても住み易い人の世ではないと覺つた時に詩と絵とが出来る。詩とは、絵とは、住み難き人の世を住み易く見せるものである。理をはなれ、情をきり、意志を絶つて、あるをありと見、なきをなしと見る時に、——換言すれば自分をあくそくたる人の世から引き抜いて、ありとあらゆる利害関係を超越した時に書くものは、人の世の詩である。描くものは人の世の絵である。この見方を非人情という、非人情ではない。不人情は利害関係の渦中も中心を離れ得ぬ。字にまよわされてはならぬ〔字をあやまつてはならぬノ意〕。最近の自分はこの見方〔非人情〕を最も要する。

〔編者註 この詩歌絵画の見解は、文字にあらわれているだけの意味では多少疑点をみとめざるを得ないけれども、その言わんとするところを深く掘り下げてゆくとき、なかなか味のある言である。かのシルレルの歌及び詩人についての言を想い起す。曰く、

「詩にあつて永遠に生^いくべきものは、この世には死^いせざるを得ず。」

「心の聖き静けき場^{にわ}に遁^にげねばならぬ、人の世の雑踏を出で。自由はただ靈の国にある。美は詩の中^{うた}にのみ花咲く。」

○1917年7月30日(月)

〔29日略す〕午後、海で宣〔武田宣彦君のこと〕が目につかをする。



種目／人名	Lord Kitchner	Black Prince	Demodai	M.Marathon	M.M.	S.	T.	N.
射矢 Arrow	26M	28	31	25.5	12	30	23	27
投槍 Javelin	18	19.5	16	17	12.5	12.5	10	8.5
クリケット Cricket	48	50.5	48	48	56	51	36	38
鉄槌投 Hammer	30	33	26	32	25	20	10	10
50m 走 50M.R.	I	II -5	III -0.5		II -1	I		III -3
幅跳 Brord-J	4.4	3.8	3.2	3.8	3.4	3.1	2.4	2.5
棒高跳 Pole-j	5	4.1	3.2	4.4	2.5	2.4	2.3	2.5
	吉原吉彌	小池政美	青木三弦	青木喬	青木実	青木四郎	小池辰雄	武田宣彦

○1917年8月1日(水)

〔31日略す〕なんだか海がふくれて来る。午後は鵜沼に行く。喬さんと実さんとが醜態にまかれる。「波乗りをして波にまかれたこと」と

○1917年8月2日(木)

朝少し降る。但し吉彌さんの見える事に懸念はない。9時見える。すぐ海に。漸く土用波らしい。午後は殊によかった。10回乗る〔波乗りのこと〕。皆まだまずい。夜棧橋へ。

○1917年8月3日(金)

時々雨。朝トランプ、オリンピック。オリンピックは面白かった。〔得点表は上記。種目：射矢 Arrow、投槍 Javelin、クリケット Cricket、鉄槌投 Hammer、50m 走 50M.R.、幅跳 Brord-J、棒高跳 Pole-j。選手：吉原吉彌、小池政美、青木三弦、青木喬、青木実、青木四郎、小池辰雄、武田宣彦〕

午後、江ノ島へ。サザエを喰べた。夜7：30、吉彌さん帰る。〔オリンピックのしんがりはやっぱり僕〔辰雄〕であった。〕

○1917年8月8日(水)

〔4日、5日、6日、7日略す〕午後の海はすてきだった。〔地曳じびきを手伝って〕小さなタコなどを貰ってバルカン〔小さい人々のことであろう、僕達三人(四郎、辰雄、宣彦)〕の喜び一方ならず。

○1917年8月9日(木)

朝、弦、泰〔を伴れて〕来。午後、江ノ島へ。海が好いので泳ぎが延びる。気持の好い事おびただ夥しい。泳いで帰る。……………喬の御誕生、甘い甘いお汁粉。余輩と雖もつくづく甘いものが嫌になる。

〔翌日は、前日のことも忘れて、また甘いもの食べた皆であつた。今となつて思えば、首かしらとなつて総括をしていた兄には色々な苦心と心づかいがあつたことが察せられる。それらのことを知らずに全く楽園の心地でこの夏を送つたのは小さい三人、四郎、宣彦、辰雄であつたらう。あとから

来た泰彦も加えられようが。——編者

さて、Epoch-Making Summer〔画期的夏〕とは物々しかった。始めから本当の所を云えば、少々疑問のあった自分の勉強は不幸にして期待した丈の成果を産まなかった。でも身体が出来たからそれで充分じゃないか等という気がしないでもない。馬鹿め！卑怯者め！それがお前のした事と云うものか。お前の身体の人並み外れていいというのではないが、人並みより少しは強い事は百も承知の筈だ。今もそんなことをのろろ云つて、大嫌いな小成に安んじて善い時と思っているのか。一年しかないぞ。覚悟はいいか。〔兄の江戸っ子氣質が躍如として現われている！〕

7月に於けるEpoch-Making Summerではなかったものの二つの意味に於て同じ名をこの夏に冠^{かむ}らせる事が出来るかと思う。一つはA、一つはB。Aは今正に進行中、Bは過去となった。もう驚かぬ地盤は出来たと云う気がする。人は何と見るか……自分は一番真摯^{しんし}な態度を採ったんだ。…………。——9月6日記

〔圏点^ゝは編者の附加したるもの〕

○1917年9月5日（水）

この日まで片瀬の夏に関するすべての経済上の問題は終局を来たす。

○1917年9月6日（木）

片瀬へ行く前に中半まで読んでいた^{エヴァンジェリン}Evangelin〔ロングフェローの長詩〕今日終る。

〔兄の書籍、キューゲルゲン「生い立ちの記」の扉に遺れる文字——編者〕

快く片瀬の夏を御覧下さった武田のお婆様から、一つにはその記念として、浪うち際の泣き顔、ポカンと浮かぶ宣ちゃん、辰さんのアブ、四郎さんの一重伴、とりどりに思い出すことは多い。ロイドデョーデ、浪の子のおみをつけ、あのお菓子棚の下や、あの鵜沼の波乗りや、いつの日か亦忘れることが出来よう。二つにはやがて来る可き、（*）Enlightened Family〔賢明な家族〕の書架にのるべき一冊として。大正6年9月。

茲^{ここ}にKügelgen（キューゲルゲン）のJugenderinnerungen〔生い立ちの記〕を読んでの感想やまたその名を聞いてから手に入れるまで四年もかかった顛末^{てんまつ}を書こうと思うのではない。その顛末は日記の内容にとどめおき、その感想は読む人の読む時の心々にまかせおいて唯我々にしてもいつかはふりかえつてこの著者の如く、Childhood, Boyhood, Youthを大胆に公平に正直に思い起こす時、よし一瞬をなりとも敬虔に親切に神を畏れ人を愛して暮らして来た^てと云い得たいと思う文を。

〔（*）“Enlightened Family”の実現を見ずして兄は永遠の旅にのぼった。私の涙は、兄のため、いつの日に尽きるであろうか。ただしかし私には此くの如き人々が聖国で孤独であるとは考えられない。天国では結婚はないであろう。しかし美しい聖い愛の交わりが若



き男女の間にはないとは考えたくない。彼らは讃美を生活とし、聖き楽しみを神より与えられていることと思う。彼らも亦永遠に人間である。(編者辰雄)

○1917年9月7日(金)

今日は龍ちゃん^{りょうちゃん}の誕生日である。軍曹殿どんなお祝いをなされた事やら。お庭の掃除も今日で一まず終る。小さいせまい三坪四坪も草取りとなればなかなか広い。桜草を摘む戸田原の方が遥かに狭い。龍ちゃん、光久さんに手紙を書く。明後日の附属の会は見合せと決する。

○1917年9月8日(土)

リンカン^{Lincoln}の伝記今日終る。額をかけながら、どうだという気がしなくなった時に第一にこの人の顔を我が室におきたい。何が偉い、この人の何処にうたれたと云う事は問題でない。あの本を読み終った時の気持だけで沢山だ。人に知らすべきものでは毛頭ない。小学校、中学校で聞いたリンカンは立身の模範としてのリンカン、艱難に堪えることの出来たリンカンであつた。今はそういう意味のリンカンではない。Sei menschlich:「人であれ!」その Menschlichkeit「人間らしさ、人間たること」を遺憾なく備えたリンカンである。僕一人の理解の上のリンカンである。夕方、武田へ行く。

○1917年9月9日(日)

午後久しぶりで原宿へ。「団さんへ」

○1917年9月10日(月)

お休みも^{とうとう}遂々終る。夕、武田へ。

○1917年9月11日(火)

今学年は先生方大変御勉強でいきなり始められる。

○1917年9月12日(水)

三田へ行く。大変疲れる。

○1917年9月13日(木)

Eltzbacher も Manigte も先生が御紹介下さった本は皆先生のお手許へ行っている。何となく武田へ Oertmann の Kommentar を見た様な気がするのを唯一つの楽しみにして引揚げる。夕方武田の叔母様がお出で下さる。おば様のお志とおっしゃってノート代を下さった。



有難く頂く。

○1917年9月14日(金)

三田からの帰りに中野に廻る。七時すぎでいたので、真暗だった。十拳君は国家の研究を読んでいた所。……外へ出ると星が美しい。明日の天気もよからうという様な気がする。

○1917年9月15日(土)

学校を休んで何かしようとするときつと雨に邪魔される。昨年の春、弦と長者園に行つた時も、初めの日は一日雨だった。民法がすんだ時にチラと見えた日の光も何辺へやら、新橋を出かけるとすぐ雨になる。

片瀬は慕わしい。二週間前いた所とは思えぬような気がする。正ちゃんの所も閉ざされて全く淋しい。海はよかった。快く泳ぐ。七里ヶ浜の音無橋の近所と云う見当で捜したが Kügelgen の家は判らない。少しお饅頭を喰べすぎたせいか十拳君は気持が悪いと云い出す。柴崎で牛乳を呑んで鎌倉から帰る。

樫木で「国家の研究」を買う。Kügelgen : “Jugenderinnerungen eines alten Mannes”(キューゲルゲン著「一老人の生い立ちの記」)「自叙伝中の白眉なり」も火曜の晩にはとっておくという。武田のおば様から頂いたお金で買うつもりなので帰りに一寸申上げて来る。

○1917年9月16日(日)

午前、喬さんからの来信、リンカン ゲッツェイスバーク Lincoln の Gettysburg の演説を殿下にお目にかけたいから写してくれないかと云う願ひ。厚かましく書く。午後、西片町へ行く。帰ったのは十時。……山内先生が居らっしゃるのだからそれ以上日土へ通う必要ないと考える。又一方から云つても一週に一日の休日は原則としてほしい。……

○1917年9月17日(月)

昨晚龍ちゃんから写真がとどく。立派にうつっている。十拳君との約束を果たすために牧野先生の刑法をとりだす。一年の始めと終りとでかくも違ふかと思われるほどよく判る。

○1917年9月18日(火)

山田の帰りに堅木へ寄る。僕に約束をした人は丁度とりに行つた留守で要領を得ぬ。九段下で偶然武田のおば様にお目にかかる。Staub : Kommentar zum HandesGesetzbuch の一卷を拝借して帰る。



○1917年9月19日(水)

一高一年の時、掲示場へ出た Kügelgen : Jugenderinnerungen の広告は今尚覚えていた。Erinnerungen は判ったが Jugend が判らなく諸井と一緒にそつと字引を出した事さえ覚えていた。秋の夜が正に長くなろうとしている頃であつたが、あの時には是を買おうと云う気が出なかった。

Lyton : Last Days of Pompeii などを読んでいた頃であつた。それから秋が四度廻つて来た。不思議な縁で十拳君が Else von Kügelgen に会う。僕がその話を聞く片瀬の松原の間で。Improvisator 「即興詩人」はあきたが Jugenderinnerungen はあきなかったと云う経験を聞く。たまたま武田のおば様下さったお金がある。と云う訳で、その上絶版の事ゆえないかと思つた本が思ひの外容易に手に入る。と云う順序。何となく武田のおば様にも責任をつくしたと云うような気さえする。ゆつくりと読もう。

○1917年9月20日(木)

今日初めて主観主義までを十拳君と論じて見る。少し議論が不足のように思われる。改良の余地は充分ある。

○1917年9月21日(金)

夕、神田橋側の三河屋で大学の我等の会が開かれる。大関先生、伊藤先生(後の五中の校長)、諸橋先生(最近文学博士、漢文の先生)がおいで下さる。来た者は15、16人。

もう話は表面で別れてゆく計り。^{ばか}内面的にはなかなか合致せぬらしい。俺にはある淋しい味がないではないが、しかし強く。

○1917年9月22日(土)

最近、民法が大面白くなつて来た。一年の時の牧野先生、上杉先生、石坂先生のような方々が居られなく、商法は未だ序論の域を脱せず、行政法は不理解の状態にあり、一方国法学、経済政策の如きつまらぬものがある関係から相対的に感じる面白味かも知れないが、物権篇、そのもの特に物権契約が面白く思われる故も明瞭にある。……………

○1917年9月23日(日)

午前は、"Jugenderinnerungen eines alten Mannes" Wilhelm von Kügelgen 「一老人の思い出の記」を読む。午後から、(1)井ノ頭へでも出かけようかと思つている中に雨が降り出す。困っている所へ武田のおば様がお出で下さる。丁度母は留守であつたので僕が色々お話を承ったり、「生い立ちの記」のお話をしたり、Lincoln、Tennyson、Longfellow の肖像をお目につけたりする。閉じていた心が開いて来たと思ひながら三時頃お帰りになる。



「(1)兄の好きな「井ノ頭」の近くに今は住む自分である。これを写している今晚(1933年6月4日)の空には月があかるく照っている。しずかな初夏の夜、BeethovenのViolin-Piano二重奏「作品30番の2」をRadioで聴く。昔の兄、今日の僕を夢にも思わなかったであろう。人の世はうつりゆく、しかし私は此のうつりゆきを単に空しいとは思えない。一つの祈りも空しくは帰らないように一つの出来ごとくも空しく消ゆるのではない。」

夕食後雨が霽れたので久し振りで散歩に出かける。例の堤の道は思ったより善く、月も一度は五日の影を水に見せる。遠くに太鼓や豊年のお祝いらしい歌を聴きながら畑の中を行くと森ぎわに蟲の聲が繁い。町へ入ろうと云う辺でどぶだかぬかるみだかの中に両足をつつこんでしまった。今日は二年振りで歩いた道。赤とんぼの並木まではちゃんと来たが、火の見る森へは出られずに、ずっと東中野の方へ寄った道へ出てしまった。中野から帰る。十時。

○1917年9月24日(月)

秋季皇霊祭、午前はひどい雨、夕方墓参。……………

キューゲルゲン Kugelgen が円と同面積の正方形を作るようにと云う作図題にぶつかって困っている。円周と同じ糸をピンでとめて正方形を作って名案だと考えている。序だから山内先生に解法を伺って見た。ところが驚いた、是は“Squaring the Circle”と云う問題で角の三分、正六面体の二倍の体積の立方体と共に不可解の三題となって数学上の謎となっている。Kugelgen の先生が何という答をしたかが知り度いものだ。

○1917年9月25日(火)

又夕方から雨になる。三田の帰りに武田へ寄って西片町へ電話をかける。毎週水曜の夕方に寄るという事に決める「英語を高校入学準備の人に教えるため」。

○1917年9月26日(水)

久し振りで夜まで図書館に残る。刑法を調べんがためである。もっと早く Frank や Olshausen や更に Lietz の二十枚を見ておいたらと思う心が沁々と起る。It might have been. 「過去にあったらよかったのと思うこと」である。……「英語のこと」幸なる第一歩と思う。

○1917年9月27日(木)

今日は危険性及び違法性を。次の週には民法に行く可く。殖民政策の理論を説いた Volksgelühl 「民族心」に及ぶとき傲慢な Britanic Peace にそれでも一種の敬意を払わざるを得ない。



○1917年9月28日(金)

夜〔浅見〕審三さんが見える。本官になって来月早々静岡県見附に転任する相。

○1917年9月29日(土)

夜大関先生お宅へ伺う。話の連絡を書いて見れば——母の容体——母の学校——聖心女子学院——そこで僕が一寸 Mother Weydon の事を、特にその遺言の事をお話したが、今晚の題目の主になった。日本に宗教の入らぬ事……全く僕にはテーストと思われる。——その原因は家族制度にある事——独乙の事——合衆国の事——最後に厨川白村くりやがわくそんの北米雜観の事、これは是非読むようにとお勧め下さる。もう群集の力、金の力、女の力がすんだ所だと云う事であつた。

○1917年9月30日(日)

この頃のように天気の良い事も珍しい。ことは辞は少し誇張されたかも知れぬが全くそういう感がする。今日も折角の日曜で、又せりふ通りに「みそかに月の照る」——とにかくその月と雨とがぶつかるといふ事は善意の第三者にはすこぶる迷惑に思われる。僕のような者で日曜を待つ者には全くやりきれぬ。昨晚のことがあるので今朝は氣をつけて見る。なるほど白村の文章がある。大阪朝日よりおくと見えて丁度金の力に盲従して居る合衆国のが書いてある。

午後浅見へ行く。ひどい雨で全く困る。先ずびしょぬれという様で帰つて来る。審三さんは思った通り留守だった。

○1917年10月1日(月)

「みそかに月の出る」と云う単に第一義の字義よりすれば矛盾している昨晚は凡ての意表に出て矛盾の仮面を脱して本義を徹底させてしまった。二度とあるまい又あられたくない大雨、大嵐、二時半頃は激しい絶頂、電灯は点かず、寝苦しい一朝をすごした。

〔これが「大正6年の大嵐」〔東京湾台風〕として今も人の記憶に残っているものである。当夜の事をまざまざと思い起こす。兄と僕とはあの同心町の二階に起居を共にしていた。その夜は僕は怖くて殆ど眠れなかった。二階は船のように揺れたと云つてよいくらい。實際倒れるかと思つた。僕は全くヤセ我慢をして床の中に小さくなつていた。〕

家という家、堀と云う堀、申し合わせたように大破損である。見るな見るなと自己をかくした因習が申し合わせてもああはゆくまいと思われるほど一斉に内部開放を実現したのは考え様によつては是も痛快である。こんな位の風や雨に心配しない位の家を持ちたいとも思つたが一面人の家なればこそ知らん顔の一夜も暮らせたと云う氣もする。

今夜とはばけた様なよい月、よい空、月にうかれ、星にさそわれて千駄ヶ谷まで。



○1917年10月2日(火)

夜、頭痛がする。中央公論の駄小説など読んだせいかも知れぬ。

○1917年10月3日(水)

西片町へ。……………6日の夕精養軒でお婆様の御誕生祝があるから来いとの事。実さんは明後日来るように電話をかけておく。

○1917年10月4日(木)

新渡戸先生は19世紀後半の、(1) Gospel of Forceを説かれる。(日本で一番おきに Carlyle を読んだ人は新渡戸先生であつたそうだ) その Cromwell 「クロムウェル」を説くに当たつて、固より夜気迫る時枕頭涙潜々たる、神を虐る彼を描くのも人を動かすが、著者「カーライル」の力を籠めたのはむしろ議会の於ける彼にある。反対党の議員に向かつて彼は何と云つた。国家は口の先や筆の先で動くものではない、出て行け。出て行けと云つて議員が席を離れなかつた時に、兵士を議場に入れて一人一人腕力でひきずり出させた。そして彼自身は入り口に出て、ひきずり出されて行く一人一人の顔をにらみつけて「あ、きさまは誰々だな、五十面さげて馬鹿目」とどなりつけ、やがて入口にピンと錠をおろして悠々と議長席に闊歩した Cromwell こそを書いたのが著者の志である。同じ人の French Revolution 「フランス革命」を見るがいい。革命裁判所で年をきかれて、年は33才、歴史の語る所によれば英雄豪傑の死ぬ時だと云つたのは誰だ。又名は何というと聞かれた時に、ダントンという名はフランス人なら知らないものはない筈だ。と豪語をした男こそ彼が描かんとした所だ。カーライル (Thomas Carlyle) に次で力の福音を説いた者はニーチェである。Master's Moral と Slave's Moral とを区別したのは如何なる影響を及ぼしている事だろう。

(1) Carlyle の “Cromwell's Letters and Speeches” が「力の福音」でないことは後に兄が自ら読んで知った。これを「力の福音」と評した新渡戸先生は読みあやまつたのであると云わねばならぬ。—— [編者]

○1917年10月5日(金)

夜、実さんが見える。……………僕の “Quo Vadis?” と富士子の同じ画集とを持って帰った。
……

○1917年10月6日(土)

夜、上野精養軒で吾妻おじ様のお誕生日と病院開院一周年とのお祝いがある。……………



○1917年10月7日(日)

今日も雨。日曜だから降るぞと許^{ばか}り降る。家ある人はまず堪えられる。家の無い人の事が思われる。現実には家の有難さを感じるような目には出来ることなら会いたくない。家が大切だという事も知らねばならぬが、体験的に、今人が払っている程の犠牲を払ってまでも認識以上の価値を認めねばならぬかどうかには聊^{いささ}か疑を存するから。

仙台から「山本」武田へと云つて送つて来た梨をとどける。……………

○1917年10月8日(月)

死に行く人——当人に気がつかぬ幸があると同時に当人のみが知っている不幸もある。幸の問題は暫く問題外として人に不幸をもらしたり、又は人から同情——実質のない、少なくとも同情者の嫉妬を起こさぬ程度の安価な同情をかけられたりするものは当人の意識した不幸に相違ない。この意味に於て、なくなつた人は実質的に現在の問題として不幸に係する所はない。少なくとも現に不幸を感じつつある人とは同日に議論すべくもない。現に不幸を感じる人の中にも国男さんほど人事上の不幸のつぎつぎ起つて来た人もまず少ない。両親と祖母と両兄一姉六人を最近五年間に失っている。あの強情なあの理智的の時代「国男氏の」を知っているだけに、しょんぼりした今日の姿は涙をひく。死に行く身は繰り返し言う、どんなに幸か知れぬ。知るに知られぬ因縁にまつわれて力に余る大きな何ものか、のろわれた如く、ジリジリと一人一人ととられ行くを見る悲哀はサイレン「Siren」、ギリシヤ神話に出てくる海の怪物」の笛にひかれてゆく若人の舟を、見送る人の悲哀である。いつまで理と智とで頑張つて居ても、知らぬ間に自身の理性に疑を抱いて自信を欠くに至らぬと誰がいえよう。知る人の限りが、自分と同じ智を持ち理にてらされる人の限りが、何時とはなしにひき寄せられて渦の中に巻かれて行くを見ている中に自分の舟さえも舳をそちらへ向けていたという事が必ずないとは誰が云えよう。サイレンを一目見たらば最後である。

○1917年10月9日(火)

丸善へ行く。カーライルの Cromwell がほしかったのだ。……

○1917年10月10日(水)

朝、富士子の用で本郷区役所に出頭。

○1917年10月11日(木)

午後テニスをして夕方西片町へ寄る。「行人」をかつて来る。



○1917年10月12日(金)

倦怠の気分。

○1917年10月13日(土)

夕方、学術講演会へ行く。原十太理学博士の「海」。面白いどころか全く閉口早々退却して錦輝館^{きんきかん}へ行く。The Deserter[邦題「旅路」]とSecret of Myraとが主なものであった。殊に前者のあどけない優しいヒロインが可憐に、いやみなく大変うまく出来ていたのが何より嬉しかった。

○1917年10月14日(日)

眼がさめると母上様が二階に行らっしゃって、資雄さんが大傷をしたと仰る。驚いて新聞を見て、英子さん達の心を思わざるを得ない。昨夕、修学旅行からの帰り汽車が伊皿子へ来た時に車掌台から落ちて頭蓋骨粉砕と書いてある。早速英子さんにお見舞いを出す。

午後、正ちゃんと中野へ行く。途中で山内——の事、(1)資雄さんの事詳しく聞く事が出来た。

.....

(1)川田資雄君は僕「辰雄」より一年以上級の(当時中学二年)秀才であった。人物もすっかりした人。惜しいことであった。山内先生の当時の心事を察すればあまりにも痛ましくお気の毒であった。

中野へ行く。三時半まで温かい芝の上で話す。お客様が見えたので失礼する。井ノ頭に廻る。……井ノ頭は一夏見ぬ間にすっかり変わる。いい所も出来たが悪くなった所の方が多い。人の声が段々聞こえなくなつて真黒な森と星々とが水に影をひたす頃まで松の木の下で正(勝)ちゃんと話す。帰りに武田へ寄る。久し振りの日曜らしい秋らしい日であった。

○1917年10月15日(月)

又熱「アブラ」が乗つて来た。今日は「共犯」をうんうんやる。夜になるとまた雨になる。

○1917年10月16日(火)

少し昨日の寒さで風邪をひいた気味がある。夜お見舞のつもりで山内先生お宅へ上る。毎晩お帰りは十二時頃との事。どんなにか御心配なさつていらつしやるだろうと思う。...

○1917年10月17日(水)

神嘗祭^{かんなめさい}。雨。三時頃かなりの地震で目が覚めた。午後は「共犯」をやる。なかなか好く判つて来たような気がする。夜、富士子、辰雄と三人で錦輝館「映画館」へ行く。又君代「文庫編集者註：高島鴻子夫人の長女」さんに似たMiss Belford「映画「旅路」のメアリー役」に泣



かされる。……………恋と愛とは全然異う、……………愛は普遍的なるを本質とする。普遍的愛には危気あふなげが少しもない。恋は恋する人の一声一笑が自己の生死の分かれる所にまでなる。愛知る人は平和である。……………

大いなる問題を提供されていささか動揺している心裡をこの巻の最後にして Epoch-Making Summer「画期的夏」を閉じたいと思う。

大正6年10月17日午後12時5分前

○1917年10月18日(木)

朝、西片町へ電話をかけて明後日午後の井ノ頭散歩を約す。十拳君との議論は共犯に入る、教唆犯に就いてかなりの激論を戦わす。……………〔内容略す〕——〇〇と牛込見付から赤坂へ出て九段まで歩いた日は昨年の今夜だった。……………丁度FAUSTの愁嘆を聞くMEPHISTOの感がある。BASILの嘆願を聞くDORIAN GRAYの面影がある。

○1917年10月19日(金)

清ちゃんから資雄さんの病状を聞く。昨日は含塩注射を何本かした話。……………

○1917年10月20日(土)

十拳君と丸善に行く。西片町へ廻る。……………とうとうおじ様のオーバーを戴いて浅嘉町に廻る。吉彌さんに会いたいと思つたが今晚から週番とやらで駄目。何か結婚祝をあげたいと思う。

○1917年10月21日(日)

……DORIAN GRAY「映画「ドリアン・グレイの肖像」今日終る。……………」

○1917年10月22日(月)

はて変なことになったもんだ、……………

「体重が増えても減つてもいいじゃありませんか」

とお答えすると、

「それはどういう意味か」

ときかれる。

「増えても減るし、減つても増えると云う事です」

と申しあげるとお機嫌が大変悪い。……………一体親不孝と云う概念はどういう事だろう、……………責任能力を有し叱られるがために親不孝行為の認識があらねばならぬ、……………」

親孝行とは自分の本心をそのまま披ひらいて陳べても親に不愉快を与えぬ点に至つて然るも



のと考える。……あるをありと見、なきをなきと見て其処に自分の本当の命を営まんとするものには因習や伝来的の辞は何等の意義を有せず、何等の有難味をもたない。

○1917年10月23日(火)

昨日も今日も実に好い天気。久し振りで昼間寝て、夜読む、なかなか好い。

○1917年10月25日(木)

朝、山内先生を訪問、昨夜遂に資雄さんが没^なくなられた事を伺う。大事な人を失った事に就いてはもう何も言わない。

○1917年10月26日(金)

久し振りで牧野先生のお講義を承る。その後で教唆の実行行為、既遂の時など伺う。すべて思っていた通り、……

○1917年10月27日(土)

午後二時、東京駅で郁二さんに会う。……キリン麦酒会社はいい所にある。所謂生を^{なま}一本呑む。少々酔った。……

○1917年10月28日(日)

お墓の美しさ、夜はたまとピンポン。

○1917年10月29日(月)

……吉彌さんへの煙草の灰皿を買う。西片町——図書館——吉原、ビールの盃を重ねて皆を驚かす。……

○1917年10月31日(水)

天長祝日。病院へ葉をとりに行った帰りに富士子に贈るものと思ったが何処も此処もお休みにはがっかり。……

○1917年11月1日(木)

……二、三日少しつとめ過ぎたためか今日は自分ながら消衰の気がする。大事な身体なる事を忘れてはならぬ。今日で一年の民法了。



○1917年11月2日(金)

午後の2時間に岡本と文展を見る。あきたせいか、それとも文展自身の罪かこれほど思
うような画も少ない。……

○1917年11月3日(土)

夜まで図書館。明日の天気晴れそうな空模様なので散歩で新しき生活に入るかそれは知
らぬ。人にはそれぞれの趣味がある。是が世間と思ひ行く人もあろう。大いなる努力を重
ねても理想に邁進する人もあろう。第三者としては目出たき家庭を祈るほかはない。……

○1917年11月6日(火)

さて明日は富士子が仙台へ行く日である。いざとなると流石に物淋しい気分がないでも
ない。嫁ぐ身は殊にと思ひやられる。死ぬ身と判つた時は尚更の事だろう。六十日を暮ら
した片瀬の家も去るとなつては慕ひかつた。三年の思出の寮の生活にしても同じ事、まし
て北の国へ、乙女十九、一人の生活。されど嫁げ、それが女の運である、力である。同化さ
れつつ同化しつつ新しき我が命を開きゆくのが尊い乙女の使命と思ひ。西に日本ありと信
じてスペインを舟出したコロンブスの気持と思ひ。只幸福な将来と平安なその日その日と
を心から僕は祈る。

○1917年11月7日(水)

朝の汽車、8時5分、お忙しいところお送り下さつた方々……。
海岸線の景色はなかなかよかつた。広重が画いたような濃いくずね波にうめられた海
を二時の彼方に臨んで汽車は物思わぬ二人を運ぶ。十拳君から借りて来た「明暗」を読み終つ
て小一時間7時半仙台着。……

○1917年11月15日(木)

代理について議論を戦わす。どうも○○君勉強が足りないようだ。
二人で資雄さんのお墓へ詣り、自分は更に染井に廻る。例の人は妙にうかぬ顔をしてい
た。下田先生の菊を拝見して帰る。夜、武田のおば様をお見舞する。インフルエンザとの事。
今朝母上様から頂いた菊をお見舞に指し上げる。

○1917年11月16日(金)

七つ八つ鳩山先生に質問する。TreuhändlerとIndirektvertreterとの区別は少々明か
で無
い
よう
にも
思
わ
れ
る。
Seheinbestandteil換言すれば民961と民242との関係はまだ考えてお
い
て
下
さ
ら
な
か
つ
た。



武田のおば様は今日はおもうお湯に入られるほど好くなられた。富ちゃんの着物が美しく出来あがった。

○1917年11月17日(土)

いい天気誘われて正ちゃんと新宿から中野までを歩く。途中で幼年校の演習に遭う。なかなかそれがあの人達の志望とはいいいながら、我々の過去六度の発火演習とは比較にもならぬ真面目を以て行われている。武田のおば様に何か花をと思つて農事試験所へ廻ったがもう遅かった。おば様は今日から起きられる。夜、実さん見える。QUO VADIS?を返し、Christmas Carol, Selfwelt, Sevastopole を持つてゆく。

○1917年11月18日(日)

晴れたるは珍し。弦、喬、実、辰と五人で勝勝さんを軍艦扶桑に訪問。大きな船だけになかなか面白い。11時に栈橋を出、3時半に栈橋につくまで4時間半を海で暮らす。3万トンは大い哉と思う。愉快だった。夜すぐ礼状を。

*

ふとずべつたら今日で三週間日記がつけてない。書くべきことがなかったのではない。多すぎてもてあます程になった。主な事の日づけ丈つけておく。細かい事はおりを見つつ。

……〔全略〕……

○1917年12月11日(火)

……今日もまた留守中に郁二さんが見えた。お酒が嫌になった事とそれを御承知の上なら喜んで銀座へお伴をする事とを書いて送る。

○1917年12月12日(水)

Prof. Prince お休み。おそろく一生一度だろうと云う噂。西片町へ。

○1917年12月13日(木)

散歩の時に辰さんと武田へ伺う。おじ様が留守でゆつくり武田のおば様からお話を伺ったり、お茶を頂いたりして8時半帰る。

おひる、井上病院で診察をうける。両方とも軽い乱視との事。左はそれに近視が交じっている由。眼鏡はかけるに及ばぬとの事。

桐法会。22日の夜、淡路亭で桐法会があつた。杉本先生、鳩山先生、穂積先生、斎藤力様、井上玄一さん、亀井などから一年の連中まで四十人位居たかと思われる。いつもの通り面白かつた。Boswell's life of Johnson を片手に湯本と歩いて帰る。



昨年の今日は正ちゃんと片瀬へ鎌倉から廻って泳いだ日であった。今朝、母上様、仙台へ。夜はお室さんを送って上野へ。……

7日には……Study Sociologyを買おうと思ってふと岩波の前を通ると彼に会った。6時頃から8時半まで愉快に話す。キューゲルゲンの事、キルケゴールの事、リンカンの事、ロイド・ジョージの事、ルカ伝4章の事、内村鑑三さんの事、夏目さんの事、彼の悪魔論、僕の社会観。日曜に三一教会に一緒に行くことを約して辞す。

9日には、久しぶりで例の教会へ行く。どうも日本人の教会はつまらぬような気がする。どうもよくない。今度は西洋人の方へ行こうと云う気になる。彼も僕も用があつたのでそのまま別れる。頼まれたのですぐ丸善へ行つたがロイド・ジョージ一冊もなし。

○1917年12月14日(金)

民法、債権論に入る。……附属のクラス会が22日に鴻ノ巣であるという報せ、会費2円の都合がつかぬのが一つの理由、若しあつたとしても本が買いたいのが第二の理由、行かぬ事にきめる。

○1917年12月15日(土)

……夕、床の間の掃除。

○1917年12月16日(日)

一日中お使い歩き。……結局どうも判らない。Bona, bela fiancee [good, beautiful bride]が欲しいもの。夜、富ちゃんの写真が来る。……

○1917年12月17日(月)

朝、龍ちゃんの撤兵適齢について区役所へ行く。士官候補生なるが故に何の苦もなく終了。美術学校選科に猶予なしと聞いて落胆していた中老の女の人がある。されど国民の第一義務なるを思え。身渺たりと雖も、やがて国の剣とり、盾握る光榮を享樂する男の本望でなかろうか。

……事ある如に御母上様の雄々しさとお婆様の優しさを感ずる。二人を育てあげられたお祖母様を思う。

木野崎の父君から彼の遺稿「碧空白雲録」送らる。……向陵二年が彼の最後の二年になろうとは人も思わなかった。彼自身と雖も期さなかったであろう。気持のいい元気な男であつたのに惜しい事をした。つくづく同級に偉大なる人々の出て来るのが判るようで嬉しくてたまらぬ。今日この頃、今更のように彼が惜しくてならない。しかし彼の思想と自分の考えとは大いなる差がある向陵二年の生活だった。二部の頭(トップ)だった。「誰か知ら



んわが果てかくも速やかに来らんとは！」の嘆きまた兄自身の上に来ようとは！」

仙台行〔富士子の結婚、11月25日〕。……11月24日～26日。辰さんがケットーを持って来てくれたのは1時10分前、汽車が出たのは正1時。……BoswellのJohnsonを読むつもりで弁当をすましてから開いて見たがどうもうまく進まない。睡くなる。……武田の御母様へお手紙を書く。一人旅——淋しき歩み——五十の命——不動の死。時の観念——現在の二面観。仙台の二人——明日の祈願。……東五軒町へ……寒い寒い。起きたのは9時、……午後1時、片平町大神宮、簡単な式、写真をとる。……広瀬川は美しい。町の中の杜^{もり}も好い。遠くに宮城陵が見える。あそこが龍ちゃんの三年の思い出か。此処が日本のハイデルベルヒ。やよい、お客様は70人ほど。富ちゃんにわかれ、保さんに挨拶し五番町で一寸休んで10時の汽車。……朝6時半着……昼まで寝る。

○1917年12月18日(火)

今日もボールをする。……肩が休まっているので大変いい気持。……毎晩寒いのに今晩はそれほど思えぬのと紅茶を呑んだお陰とで大分仕事がかどる。少し毎晩がんばらねばいけない。

今日は光久さんと la bona et bela fiancee との事。……人格、成績上々との事。どんなにこの縁談の成功を祈った事だろう。……10日夜退京、カーテン〔舞台の幕、交流を遮るもの〕と云う始末。いささか何んてコッタイという気味がある。しかし考えて見ればさても気の毒、はても気の毒。

○1917年12月19日(水)

……帰って寝たのは12時。

○1917年12月20日(木)

毎日いい天気がつづく。今日で経済、終る。来学期はいきなり二年の事をする事にきめる。

Grunze : Geschichte der Ökonomie により。……

○1917年12月21日(金)

三田今年最終。……ペケ。夜、帝大基督教青年会の生誕祭に。

○1917年12月22日(土)

学校終る。午後辰さんと二人で——宣ちゃんは急に用事が出来て来られず——
タンネンbaum 「クリスマス・ツリー、樅の木」を見て廻る。三越——丸善——大倉——伊東屋——教文館——明治屋——警醒社——中西——三省堂——東京堂——パウリスタ。



「今から16年前の暮の一日！ 思い出は永い。Abend des Tannenbaumes! (樅の木の夕ぐれ)」

○1917年12月23日(日)

Trinity Cathedral の English service へ。(1)岩瀬に会う。……佐伯さんに会う。“Letters and speeches of Lincoln.”を贈る。6時武田へ。宣ちゃんに English books を。

〔1)岩瀬さんは附属中学の同窓の友。兄が亡くなった翌年(1922年)2月のはじめ、同じく腸チフスで召される。親切な好人であった。〕

○1917年12月24日(月)

午後郁二さん見える。「心」と「漱石俳句集」とを贈る。夜はプランタンで。……

○1917年12月25日(火)

三一教会のクリスマスへ。

○1917年12月26日(水)

丸善へ(Childe Harold, Grandfather's Chain, Scarlet Letter)。三越、西片町、実さんにC.H.とG.C.とを。

○1917年12月27日(木)

……明日は母様お立ちの筈。年賀状150枚。

○1917年12月28日(金)

7時、寝すごしたかと驚いておきる。母様お腹の具合悪くてお見合わせ、午後武田へその事を知らせに行く。……

夜、内村さんの『求安録』を終り、『宗教と文学』を読破し、『基督者問答』に入る。読んで読んで29日の朝1時半。

「それは私は罪人であるという事を発見したからであります。私が生まれながらの罪人である事が判った時に、私は私の理性までを信じなくなりました。罪は人の体と心とを汚すに止まりません。彼の理性までも狂わせます。生まれつきのままの人の心を以てしては到底神を見る事は出来ません。彼が神の事を判ろうと欲えば、全く自己をすてて神の光明を仰がなければなりません。」

という章へ来てギョツと首をおさえられた。もう動けぬ。人以上の理性をそなえ、普通以上の判断をそなえつつ、常に悪に征服された身は生まれながら罪人に相違ない。罪は身体



と心とのみならず、理性をも犯して来るに相違ない。悪を悪と知りつつと云う時には単に悪を悪として知りつつのみではない。必ずや何等か弁解が、弁解する心が手助っている。手助っている心は微だけれどもそれは自分に意識されている事が微かなるに止まり、何所までが誤られざる理性で、何所からが悪に支配されている理性なるかは見当さえつかぬ。否考えて見た事すらない。それ丈理性が誤られている。もう理性に信用などは出来ない。とても出来ない。只祈る外はない。祈つて神の黙示のままに進む外はない。やつと是だけでも判つて来た事がどんなにうれしい事だろう。〔アーメン〕

○1917年12月29日(土)

朝8時45分、母上様、武田おじ様、おば様、長岡温泉へ出かけられる。東京駅までお見送り。教文館へ廻つて、古今聖歌集、祈祷書、Common Prayerを。警醒社へ行つて『大石蔵之助』『洪水以前記』を買う。帰ると龍ちゃんが来ている。母上様、おば様方、保さん達へ年賀状を書く。母上様とおば様には昨晩の気持ちを書いてさしあげる。書中、

「我らを嘗試に遇わせず、悪より救い出したまえ」

という事は弱き信者の泣き言にすぎず、摂理ならば最恐るべき誘惑にも最嫌うべき穢にも凱歌をあげて進まむのみと書く。〔傍点は編者のもの〕。

後になつて考える。悪とは何ぞや、悪は何処にありや、悪は外界に非ず、常に内心に有す。外界の事物は二次的現象なり。受身なり。悪の本性は内心にあり。内心に起こる慾意の外界に徴表を有せざるを以て安んずる勿れ、内心の悪あるを以て既に足る。起これる慾を抑えたりとも起こりたる事實は起こりたる事実なり。慾あることは動かすべからざる消すべからざる事実なり。ここに到りてはただ神を頼らんのみ。たよりて心中又かくの如きなからしめ給へと祈らんのみ。

「我らを嘗試に遇わせず、悪より救い給え」

〔即ち知る、「我らは弱き者なれば、願わくは試みに遇わせ給うなかれ、されど試みにあい、悪と戦うときにはどうかその試み、その悪からお救い下さい、悪に対して勝たしめて下さい」と云う意の祈りなることを。〕

○1917年12月30日(日)

築地へ。ロバートンの説教。聖ポーロは完全ならんことをねがえり。——beとdoとの区別。innocenceを忘れよ。無邪気を忘れよ、とは氣に入れたり。無邪気は悪を知らず、する事無意識に、客観的に他に害を及ぼすなきにとどまる。主観的価値零なり。客観的価値は消極的なり。青少年時代を顧みて、あの時はあそこで、などというのは完全にbeの所以に非ず。岩瀬見えざりし故に彼の家訪問、1時帰る。

障子張り、松飾、非常に忙しい。でも四六時中讃美歌が耳の傍に聞こえているので愉快。



○1917年12月31日(月)

年又も暮れんとして案外に過去を顧みるの念少なし。母様おば様あてにお手紙を書く。すべてその中に。さようなら、1917年よ。

*

母上様

おば上様

私はお二人に日記の断片をお目にかけるのが非常にすきでございます、書いてしまうですつとします。それだけでも解脱する所があるかも知れぬと存じます。それにつけても、この度もまた心おきなく又意外の不愉快をも起こさぬようにお二人でお出かけ下さいまして私も心平けくお膝下まで又何枚かの紙をさしあげる事の出来ま^{ます}すのも実に幸と存じます。私の辞はずい分まずいという事は益々^{ます}覚つて参りましたから、充分注意するつもりではあります、しかも徹底しない所があるかも知れません。しかし今夜のは単に文字の上のみでなく思想そのものにきまりがないのですから尚更おわかり難いと存じます。お判り難いと存じつつも尚是非申しあげたいと思つて書いていますのでございます。字が読み難いの、小さな字でしかも間をあくの、と仰つて下さいませんように。気がおちつかず只申しあげ様申しあげ様と思つて居ります時には字の巧妙や文章の上手下手などに注意を払う暇もございません。そのかわり所によりましてはペンから出るインクの形が私の心そのものを最も明瞭に表わす事もございます。前の頁の真中頃に実に幸でございますと書きました一句もその例でございます。(中略)

9月に同じだけおば様から頂いて長い間欲しくてたまらなかつたあのキューゲルゲンの「生い立ちの記」を——それも今は絶版になつてゐるのを思いがけず容易に手に入れたあの一週間の方がどんなに愉快だつたか知れません。(中略)

母上様とおば上様とで本当の私を一分一分、一步一步御了解下さる機会が与えられた訳ですから本当に神の恵と信じます。私は私の良心に何等やましいところなく神恩という事を敬虔の情と共に口にする事が出来る様になりました。「実に幸と存じます」の説明が余りなくなりました。本論にもどります。

今朝の予定はこうでありました。午前8時までに予定の所まで本を読んでしまふ。8時から9時まで日記を書く。9時から10時まで母上様とおば上様とへお手紙をさしあげる。お手紙には暮の気持——家の様子——私が辰さんと一緒に龍ちゃんの手までを借りてどうにか仕上げた家の様子をお知らせしたい、と考えました。一番さきに申しあげた様にお手紙をさし揚げる事が非常にうれしんですから非常な期待を以て予定の進行するのを待つて居りました。龍ちゃんは5時すこし過ぎに帰りました。8時まですむはずの読書が9時までかかりました。日記はすこしも進みません。一体そう筆まめではないものの普通に筆は運ばせ得ると信じて居りました。私の日記は知らぬ間にかなりのかさになつています。



私は毎日々々必ずはつけませんから紙数や冊数ではそういう根気のいい人には敵いせんが、内容に至っては人に見せられぬと同時にもつと深刻に進んでいます。母上様とおば上様とにさしあげる事はそれでは虚言ばかりならべているのかと仰るかも知れませんが、そうではありません。悪心に満ちみちた私も時に悪心の起こらず——或は起こつても楽天的気分になつて気がつかぬものかも知れませんが、意識上には悪心の跳梁跋扈なき日があります。そういう日に、そういう日の真の私を告白して来たのであります。又少々論が離れて来ました。本に帰ります。人並みの筆を持つている私の過去数年の大晦日の日記は記憶している範囲では毎年世間並みに可成長いものでありましたが、今年は今日は少しも進みません。強いて思わねば何も過去一年の事を思い出しません。29日にさしあげました前便当時だけすら明確に思い出しません。しかしそれも無理もない事でございます。昨日今日、私の心は前へ前へと進んで居ります。はやる心を只時間と云う今はのろいのろい障礙のためにとられています。いくら廻したくとも時の小車は白鼠の全力をつくしての汗にも荷は重すぎます。クロムウエルと雖もリンカンと雖も嘗ては是の経験がきつとあつたと思います。あとふりかえる一瞬のいとまもございません。去り行く年と明け来る年とはざまに立つた平衡な心はすでにやぶれました。人より三日早く大晦日をすませた訳です。大晦日をすましたからもう元日になつてもよきそうなものなのになお大晦日の故に12月30日があります。31日があります。なんとかいのんきな人が、

「年のうちに春は来にけりひととせを去年とやいはむ今年とやいはむ」

と古今時代に申しました。私はそんな呑気な歌をうたつていられる気持ではありませんが、主観には新しき年来る可くして客観には尚古き年の境を脱せぬ境遇にありという点に於て聊かこの歌人と趣きを一つにし異にする所があります。とにかくそれ程先を急いで居りますので日記には手がつきません。そこで日記には、

31日。年又も暮れんとして案外に過去を顧みるの念少なし。母上様おば上様あてにお手紙を書く。すべてその中に。

「きょうなら 1917年よ」

と書くにとどめました。そしてその所謂母上様おば上様あてのお手紙が即ち之でございませす。

しかし日記に書けぬことがこの中に書けるではありません。日記に書けぬのは時間がないからではありません。筆が進まぬのではありません。書くべき事にまとまりがないからです。書く可きことがハッキリ判つていないからです。どこまで書いても書けるかも知れませんが、それは私自身にもまとまりがつかないのですからそれを母上様おば上様に御了解いただくというのは失礼でもあり、無理でもあります。又本当に判つていないのですから、一番書きたいにも拘らず、それはやめて第二次の事をかきます。第一次のことは来年になつても判るか判らぬか、わかりません。十年かかるかも知れません。一生かかる

かも知れません。只私は小さき者として敬虔に謙遜に神の子——神の愛をうける特権ありと信じて進む外はありません。幸はつきりして来ましたから先ず聞いて頂くのは母上様とおば上様の外はございません。しかしそれもすべて何時か来ることを祈りつつも本^{もと}になる私の理解が来る迄は可能、不可能さえ確定せぬ事でございます。存否さえ確定しないのですから時期の預言は尚難しうございます。

そこまでしておいて何だか心残りがしますけれども、第二次の今日の家の状態をお知らせ申し上げます。けさは色々書く可きことなど想像されたのですが、第一次が第二次の意義しか有し得なくなつたためか、又はきまりのつかぬ第一次に心の半以上を不知の間^まにうばわれているかの、おそらくは両方のせいでなかなか順序よく今朝期待した様な気のきいた手紙をさしあげることが出来そうにもありません。気のきいた手紙は私がさしあげたくてたまらぬ一つでありました。気のひける様な文句や文字をあげたくはなかつたのですが、今はもつと「ほんとう」をしつかりつかむ勇氣が出て来ました。文字も文章もきのきかぬ事は十分知りながら思つたことを書きつらねます。

お飾りの道具を買いに行つたのは29日の晩でした。(中略)

いかだのかきだのは外^{ほか}で買つて帰りました。買つて来たいかは家で私達が出かける時丁度来て待つていた龍ちゃんがつもつて直ぐ上野に行きました。

30日の午後、紙をきつて環^わじめにつけたり、松を立てたり、大体の事が出来あがりました。今朝はお神棚、仏様を綺麗にし二階を掃除しました。お神棚と仏様との油皿は辰さんが磨いてくれました。あれは一番始めには私と龍ちゃんとが磨いたものでした。豊美さんが手伝つて下さつた時代もありました。去年は富ちゃんが磨いてくれました。今年は辰さんの番になりました。是から暫くは毎年限さんの仕事と定まりそうです。すんでから辰さんは髪床に、私は用があつて本郷まで参りました。用の一つは羊羹が買ったからであります。お客様の見えぬのは判つて居りますが私も龍ちゃんも辰さんも好きですから事にきめました。藤村へ行きましたがあまり混んで駄目なので思いきりました。青木へ行つて咽をやいて頂き、遂^{とう}々松仙堂で買いました。

帰りがけに花屋へよつて千両を頼みましたら二枝で三十何銭という事でしたのでやめました。下のお座敷には南天と水仙とが立ててあります。大変うまく生けてあるので、よし(女中)は驚いています。外に来て驚くお客様があるかも知れません。実は根が結^いえてあります。いわえたのは植木屋——花屋です。二階には何もありません。銅の花瓶に何かさしたいのですが30何銭では下より高くなりますからやめました。やめましたか帰宅し床の間を見るとどうも物足りなくなつてたまりません。私と辰さんの本は袋戸棚とその前においた机の上に一杯に並べてしまつたのですが、床には義家がかけてあります。金と朱とで輝いています。義家も嫌なら、描いた山本龍潤という男も嫌いです。どうして富ちゃんと龍ちゃんとの字をその中に持つているかと思うだにいやになるペイペイ男です。是がリンカンだつ



たならあと本当に思いました。本郷へ行く前に若し団さんから金が来たらすぐにも買いに行きたいと思いましたが遂々団さんには忘れられてしまいました。しかし未だリンカンをかけるまでになつていないのかも知れません。残念ですが、リンカンの敬虔とリンカンの人間さとリンカンの理解した愛とをもつと考えると考えねばなりません、信じなければなりません。摂理と信じて義家をながめます。義家の前に銅の花入れがポカンと口を開いています。其所で龍ちゃんと相談して二人で千両を買うことにきめました。夕方、昼間見たのをといてそいそと出かけましたら、もう売り切れたあとでした。致方なしに外の花やに参りました。この親爺は赤い二本の千両にはどうしても水仙が入用だと云つて水仙まで売りつけました。千両の枝は細く、銅の花瓶の口は広いのですからどうもうまく行きません。お花の先生はどうするのかと思いました。仙台のことなども思い出されました。そのうちに大変うまく立ちました。自然に雄の花と雌の花とかいう法則にかなつていくかどうか存じませんが、大変すなおに気高く立つてくれました。二枝の千両を立てたきりです。水仙はよしにやつてしまいました。水仙と云う花はどうもすきではありません。出来上がって見ると山本のお婆様がいらつしやなくて幸だと思いました。枝をたゆめられたり嫌な水仙までをそえられたりしたら、どんなにかつまらないことだろうと考えました。自然の花を眺めると自然の人を思い出し、リンカンの像ならましかばという気が猛然と起こります。

地袋(?)の上の欄間にはハイアワサーが舟をのり出している所が昨年——今年のお正月以来旧態を持っています、ハイアワサーの好きな時もありました。今は少々変わつて来ましたが尚認めて置くことにしました。ハイアワサーの真向かいに、父上様、母上様、可愛らしい龍ちゃん、富ちゃんと私との五人の写真があります。今更に龍ちゃんは実に可愛らしいございます。富ちゃんはこれがもう新しい家の主婦かと思うばかりです。お父上様もまだこの頃は元気でいらつしやつた。お母様未だ未だお若かった。只私ばかりは既に悪党らしい面持であります。只無知と無能力となるが故にのみ悪行をなさんと云うのは、悪心の素質すでにありといった様な調子がないとは云えないと思います。辰さんがこの中に入つて居ないのは同じ室に机をならべて是を見る時に四六時中気の毒に思います。但し今晩はもう11時ですから(辰さんが)寝てから三時間近くなります。筆筒の上には箱だけ、辰さんの机の上にはインクと筆立て、私の机の上にはマゼヨリカとみだれ籠だけ、大変きれいに片づいて誰でもこの室に入つた時には、まあと思うと信じます。ただ義家が黒い額へ入ったリンカンだつたらハツと思うところがございましょう。まあとハツトとは大変な相異です。

是で千両からひきつづいての室の説明はすみました。千家表流よりも裏流よりも今晩は私の腕前の方が上らしいございます。「是が今日の獲物さ」と云つてアルプスの獵人が胸のボタンの穴からはずして渡すエーデルワイスと同じ意味を持つて居ります。そこがいいんです。



お年取りは無事お昼にすみました。

おそばは夜食べました。お湯をたてて龍ちゃんも入って行きました。「時刻が来れば帰校」もうこれで書くことがなくなった様な気がします。

固より第一次は未だ未だ片つきませんが、是は只時をまつ外ございません。

長々申し上げました。ずいぶんお読み難かつたろうとお詫び申し上げます。

今晚は御地でも色々お物話あつた事ではあるまいかと考えます。仙台でもおうわさして居りましょう。私も身体も丈夫、心も、おちつかざるも健全、龍ちゃんは昨日の旅行の愉快を又夢に見て居りましょう。辰さんは寝てから三時間余り、宣ちゃんも明日のことなど寢言でも言っているかも知れません。こう思うと非常に幸福で御座います。六畳はいつもとまるで変つた所の様でございます。歡喜の至りでございます。感謝の窮局きわみでございます。

大正6年「1917年」12月31日午後11時12分

政美拝

御母上様

御おば上様

風がやんだと思つて戸をあけましたら空は曇っております。これを書き出す少し前に輝いていましたオリオンもシリリ阿斯もかくれました。月丈はぼんやり見えて居ります。かさをかぶつて居ります。降られたら大変でございます。雪だったら思いやられます。

〔以上、レター・ペーパーに細字にて十四枚。〕

(宛先) 伊豆国長岡温泉 共栄館

小池光子 様

武田松子 様

(発信) 大正6年12月31日

東京小石川同心町18

小池政美 拝

〔附言。一度投函された書翰である。日記の間より発見する。——編者〕

